

仮面ライダー
× Fate/GrandOrder
光記憶都市

残

地水

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時代が望む時、仮面ライダーは必ず蘇る。

カルデアのマスター・藤丸立香が目覚めると、そこに広がっていたのは荒廃と化した一つの都市だった。一体どうやってやってきたのか記憶にない立香に謎の敵が襲い掛かる。絶体絶命のピンチの時、彼を助けたのは一人の仮面の戦士。

それは、歴史の中に消えたはずの仮面ライダーだった。

謎の特異点にて始まる、自分達の世界へ戻るための聖杯戦争！

※Pixivにて同名タイトルが同時投稿中

目次

幕間：制作裏話	89
最終話	77
第5話	61
第4話	44
第3話	29
第2話	14
第1話	1

第1話

「ううん……ううん」

——少年『藤丸立香』は何処とも知れない場所に立っていた。

黒い短髪に海色の瞳の容姿を持つ彼は、今までぼやけていた意識をはつきりとさせる
と周囲を見渡す。

辺り一面は廃墟となった高層ビルや施設と思われる建物が転がっている。

「何処だ、ココ……冬木に似てるっぽいけど…」

人理保障継続機関・カルデアでの訪れ、『マシユ・キリエライト』を始めとした仲間達
との出逢い。

人理焼却による人類絶滅の危機、歴史上の偉人・英雄が時代を超えて召喚された英霊・
サーヴァント。

特異点Fから始まった七つの特異点での未来を取り戻す戦いは終わり、ようやく明日

へ続く未来を取り戻した……はずだった。

だが、立香がいる場所は何処からどう見ても自分の知るカルデアの内部でなければ、今までレイシフトした先の時代にあつた光景でもない。

そもそも、何故自分がこの場所の至るまで「記憶がない」。

とりあえず、ジツとしたままではどうにもならないと思い、何かを見つけるまで歩き出した。

「……どつからどう見ても、現代だよね。何処なんだココ」

当てもなく歩いている傍ら、周囲の様子を伺う。

街の様子は相変わらず人気がなく、何処かしらに炎上の光景と空が淀んでない事を除けば特異点。冬木とそう変わりはない。

しいていえば、建物が何処か日本の都会と感ずるだろう。

(東京か……懐かしいな、日本。カルデアに行つたつきりあの戻れなかつたんだよな。こんな形でまたみられるなんて……)

カルデアに連れて行かれた後、様々な出来事があつて戻れずじまいになっていた。過

去に日本に発生した特異点で赴くことがあったけれど、どれも立香の故郷ではない。

何処とのなく悲しみを感じているその時だった、——背後から大きな足音が耳に届いたのは。

「ッ!!?」

嫌な気配がする、そう何かの予感を巡らせた瞬間……立香の横を『何か』がすり抜け、捨ててあつた廃車が破壊される。

首を振り向いて背後を見るが、そこには人の姿も敵の影も何もいない……。

だが、姿が見えていないはずなのに「何者か」の殺気が目の前から放たれているのが嫌というほどはつきりとわかる。

【不可視の襲撃者】というべき相手が出現した事に立香は冷や汗をかく。

「マジかよ……こんな時にか!!」

『……………ッ!!!』

けたたましい咆哮が放たれ、空気を震わすほどの振動と同時に立香は一目散に走り出す。

後を遅れて不可視の襲撃者が追いかけて、距離が狭まれていく。

襲撃者の正体がなんなのか分からない以上、迂闊に手を出すのは愚策と判断したからだ。

それに、本来なら戦闘の時は自分が契約しているサーヴァント……マッシュや、カルデアで契約しているサーヴァントが対処するのだが

この場所にいるのは自分ひとりだけで、根拠はないが何故だが『サーヴァントでさえ呼びかけに応じてくれるかさえ怪しい』…。

そう直感が訴えてくる立香は、なんとか追手から巻こうと逃亡を図る。

いくつもの特異点で何度も危険と巡り合わせ死線を潜り抜けてきたが、今回ばかりは命が取られるかもしれないと感じ取る。

「くそっ！まだだ、まだ会えていないんだ！こんなところで倒れるわけには!!」

脳裏に思い浮かぶのは、仲間達サーヴァントの姿、そして相棒であり契約したデミ・サーヴァント……マッシュ。

何も見知らぬ大地で朽ち果ててたまるかという気持ちが高ぶったその時、彼の手に宿る令呪が光り輝く。

「もしかしたら……！——来てくれ！俺の呼びかけに答えてくれ!!」

叫ぶと同時、不可視の襲撃者がすぐそばまで迫り、凶器の刃物が立香を付け狙う。

その刃が切り裂く、まさに寸前——遠くからエンジン音が吹きすさび、遠くからやってくる高速の大きな白い影。

立香と敵対者の間を割ってきたのは、白いボディのオープンスポーツカー。

「あれって…車!?!」

『!!!』

「——邪魔だ!!」

スポーツカーは猛スピードになりながら、不可視の襲撃者へ激突。頑丈なボディをもちろに受け、遠くの瓦礫の方へ突き飛ばしていった。

スポーツカーが立香の目の前へと止まり、運転席から持ち主の姿が現れる。ダークグリーンに金色のラインが走る強化スーツを身に纏い、首に巻かれている金色のマフラーが激しく靡く。

飛蝗を思わせる仮面に黄金色の複眼が立香の姿を捉え、問いの言葉を投げかける。

「お前か？俺をここへ呼んだのは」

「貴方は…」

「——仮面ライダー3号」

仮面ライダー3号……そう名乗ったライダーのサーヴァントは、スーパーカー・トライドロンから飛び降りると、不可視の襲撃者の方へ立ち向かっていく。

「トウツ！タア！ハアツ!!」

3号ライダーは拳と蹴りによる格闘のコンボを襲撃者へお見舞いしていく。襲撃者は短剣「ダーク」を取り出し、3号ライダーへと素早く投げつける。だが3号ライダーは軽く躲すと、距離を縮めて手刀を繰り出した。

「ハア!!」

『ぐがぐ?!』

「どうした？小細工ばかりで倒せると思うなよ」

一旦距離を取り、立香の傍へ戻る3号ライダーは挑発を込めた言葉をなげかける。その様子を見て、立香は彼が先程名乗った名前を口づさむ。

「仮面、ライダー…?」

突如現れたサーヴァント・仮面ライダー3号に息をのむ立香。

自分の目の前に立つ彼は、まさに幼き日に夢見たTVの中のヒーローそのものだ。

「ああ、お前がマスターって奴か」

「多分、オレが貴方を呼んだ。あなたはライダーのサーヴァントなんですか…?」

「さあね、何分と俺も初めてだからね。理解しているのは俺も『サーヴァント』という存在であるのも、相手も一筋縄じゃいかないやつってことだ」

「俺『も』……ってことは!」

先程吹き飛ばされた不可視の敵が立ち上がるような音がすると、その姿を二人の目の前に現す。

黒い霧で構成されてた巨体には、いくつもの白い髑髏の仮面が張り付けられている。

さらには背中からは毒々しい液体によって形作られた少女の上半身が生えており、右腕は赤くまるで異形の様。

もはや怪物と言うべき『ソレ』をようやく視認した立香は驚愕の声を上げる。

「まさか……、——サーヴァント!?!」

姿形は自分が知ってるのと全く違うが、身体の至る所に張り付けられたあの「骸骨の仮面」は見間違えるはずはない。

——ハサン・サツバーハ。かつて中東の暗殺教団の党首であり、歴代の党首達はそれぞれ別の技を収めた達人達。

かつてのカルデアでも何人かのハサン達が召喚されており、共に冒険してきた。

だが立香の知るハサンの特徴を兼ね備えながらも、今現在遭遇しているハサンはおお

よそ彼らとはかけ離れていた。

「ハサン?でも、あの姿は……!」

「互いを纏め上げて辛うじて存在はできているようだ。気を付けろよ?明らかにアレはお前を殺しにかかっている」

「嘘だろ……!」

「下がってろ!来るぞ!」

【異形のハサン】というべきアサシンのサーヴァントは、高く踏み込み跳びあがる。

振り抜かれた左腕の巨腕が立香を屠るべく抜けられるが、同じく高い跳躍力を誇る3号ライダーがその拳を受け止めた。

あいさつ代わりに裏拳をお見舞いしながら、3号ライダーは声をかける。

「悪いがいきなりソイツはよしてくれ。仮面のよしみとして聞いてくれないか」

『うがああああああ!!』

「やっぱりか、サーヴァントになる奴は気難しい奴らばかりか!」

自然落下しながら取っ組み合う異形のハサンと3号ライダー。

長細い右腕と大きな左腕という不釣り合いな両腕では簡単に抜け出せる。だが、それを見越してか、異形のハサンの背部にある「毒の娘」が動く。

3号ライダーに寄り添うように近づき、彼に抱き付こうと腕に広げる。

『【妄想毒身―ザバーニ―ヤー】…!』

「チツ…いきなり必殺技とは芸がない!トウ!」

毒の娘に嫌な予感を感じた3号ライダーはハサンの胴体を足場にして蹴り上がり、いったん離れて距離を取る。

地面へ着地した3号ライダーは、手短にあつた大きな瓦礫をハサンの思いつきり投げつける。

投げ飛ばされた瓦礫はハサンに激突直前、毒の娘が少女の姿から液体として飛び散つて瓦礫を飲み込む。

瓦礫は全て跡形もなく溶かされ、嫌な予感的中した3号ライダーは仮面の裏で苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべる。

「やっぱり触つてはダメか。下手な怪人より厄介だなこれは」

「気を付けてライダー! 静謐の毒はサーヴァントでも危険なほど強力なんだ!!」

「なに? アイツの能力の事、分かるのか?」

「全部は分からないけど、いくつかなら…!」

3号は立香に背を向けながら尋ねる。立香もその戦う背中を見ながら頷く。

その間にも異形のハサンから分身が生み出され、二人を仕留めるべく取り囲んでいく。

『【妄想幻想―ザバーニヤ―】』

「こんな状況で言うのも変だが、どうやらお前とは気が合うようだな」

「同じだ、オレも何故だかアンタを信じられる」

お互いまったく見知らぬ存在同士ながら、この世界に流れ着いた何者かさえない二人が雌雄を決す時は今だ。

「力を貸せ。アイツを倒すにはお前が必要だ」

「わかった、オレもできうる限りの援護はする！」

「頼んだぞ！」

マスターとサーヴァント、藤丸立香と3号ライダーの共闘が今成立した。

その直後、ハサンの分身体が一斉に襲い掛かる……が、3号が抱え跳び、遠隔操作によつて走ってきたトライサイクロンのバルカン砲が蹴散らしていく。

トライサイクロンに飛び乗った3号は、助手席に立香を乗せると、ハンドルを握ってアクセルを握り締める。

「掴まってる、フルスロットルだ！」

「うわあああああ!?!」

距離を離していくトライサイクロンを見て、異形のハサンは右腕を構える。

呪いの右腕が一層赤く輝き、振るい上げると伸びていく。

『妄想心音―ザバーニ―ヤー』、悪魔《シャイターン》の右腕に触れられた相手は生み出された偽の心臓を握り分され、共鳴して破壊されるだろう。

それは立香はもちろんのこと、例え3号ライダーといえども心臓を失えばひとたまりもない。その右腕がフルスロットルで逃げて行くトライサイクロンへ伸びていく…。

『妄想心音―ザバーニ―ヤー』

「今だ！ガント！」

「ツツ!!」

立香に触れる直前、彼の着込んだ魔術礼装に仕込まれた呪いの一撃が右腕に叩き込まれる。

右手に受けながら短いひと時の体の自由を奪われる異形のハサン……時間を稼ぐには十分だった。

車体を180度回転したトライサイクロンがハサンの下へ走り始める。3号は運転を手放し、トライサイクロンからジャンプ、右腕にパワーを集中させて必殺の一撃を叩き込む。

「ライダー……パンチイッツ！」

『ぐがああああああ!!』

3号ライダーの拳から放たれた「ライダーパンチ」が、アサシンのサーヴァントへ炸

裂。

ハサンの霊基の中心である霊核を撃ちぬき、決定打を決められた。

「ふうう……し、死ぬかと思った」

「上出来だ。へっぴり腰かと思いきや中々やるじゃないか」

「アハハハ……上手く言ってよかった」

一息ついた立香に、珍しく相手を認める3号ライダー。

一方、異形のハサンは数歩後ずさり、膝から崩れていく。やがて黒い靄の体からいくつもの人間の影が崩れるように這い出では消え去っていく。

最後に残ったのは異形の右腕を持った者、毒の体を持った娘、一人の髪を纏め上げた仮面の人物。

3人は消えていく体を見ながら、ぽつりぽつりと言葉を呟く。

『我ヲヲシタ事ガ、自ヲヲ見失ウトハ不甲斐無イ……』

『アア、晩鐘ノ音ガ聞コエル……』

『願ウナラバ怪物ト成リ果テタ我ガ身ヲ』

彼らの構成する霊基が砕け散り、金色の粒子となって消えていく。

3号は消えていった場所を見ながら、立香に問い尋ねる。

「お前、アイツらの事を知ってるようだったが……知り合いか」

「うん。といつても彼らじゃない本人を知ってるだけだけど……変わらざいい人達だったよ」

「そうか……俺達ができたのは、歪んだあいつらを倒すだけだった」

3号はそう言いながら、変身を解く。

そこに現れたのは、一人の大人びた日本人の男性。3号だった男は再び尋ねる。

「ところで名前はなんだ？ 正直、マスター呼びは性に合わないんだ。教えてくれ」

「えっと、藤丸立香。藤丸立香って言います！」

「なるほど……俺は黒井響一郎だ。よろしく、立香」

藤丸立香と黒井響一郎。白紙にされた未来を取り戻すために戦う少年と、歪められた歴史を戻すために消えていった男。

似て非なる者同士が今ここに邂逅した。

第2話

カルデアのマスター・藤丸立香と歴史に消えたはずの仮面ライダー・3号／黒井響一郎が出会っていた同時刻。

高速道路であった場所にて猛スピードで駆けていく一つの影。

一人は黒衣の衣装の上から鎧を身を包み、竜の紋章が描かれた旗、病的なほど白い肌と髪を持つ「竜の魔女」。

もう一人は十字のデザインが施された強化アーマーを纏い、「マゼンタ色の仮面の戦士」。

仮面の戦士の相棒であるバイクに乗って二人は追手から振り切ろうと走りゆく。

そんな最中、仮面の戦士が別の場所で起きた「何か」を感じ取った。

「——ほう、どうやらお前の目的の奴さんは無事に運命を引き当てたようだな」
「ハンツ、それはどうも無駄な報告をありがとう。別に心配なんてしていませんですから」

「信頼しているか？カルデアのマスターとやらを」

「バカ言わないで。そんなんじゃないわよ」

迫って来るは複数騎のシャドーサーヴァント達。さらには先頭を走る一騎と共に深くフードを被ったランサーのサーヴァントがいた。

手には大きな鎌、フードの中から覗かせる片目が怪しく二人を見つめる。

その様子を見た二騎のサーヴァントは深く溜息を付くと、バイクを180度急転回させて方へシャドーサーヴァント達の方へ向き直った。

「さてと、いい加減追いかけっこも飽きたし、俺達もランサー・オルタと決着をつけるか」「ええ、やりましょう破壊者さん。我らの憎悪と憤怒、彼らにぶつけるわよ」

仮面の戦士と竜の魔女はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、フルスロットルにしながらシャドウサーヴァント達へ突っ込んでいく。

幾分かしない内に爆炎と斬撃と銃撃が元高速道路に彩られ、シャドーサーヴァント達は塵となって消えてゆき…。

かのペルセウスが使用した鎌・ハルペーを携えたサーヴァント……ランサー・オルタは撃破された。

アサシン・ハサンとの戦闘後、立香は響一郎の操るトライサイクロンに乗って走り行く。

流れゆく街の様子は相も変わらず、高層ビルだった廃墟と瓦礫の残骸のみ。車を走らせている自分達を除けば相変わらず動くものはいない。

者惜しげに見ている事に気付いた響一郎は立香に訊ねた。

「どうした？景色を見て何か思うところがあるのか」

「その、この世界が日本の都会に似ているなって思つて懐かしい気持ちになつて……」
「まあキミの言いたいことは分かる。その東京に似ているって感じたのも強ち間違いない」

「あながち間違いじゃない？」

響一郎の言葉に首をかしげる立香。その様子にやれやれと呆れながら、響一郎は分かりやすく説明を始める。

「俺も詳しい事は知らないが、いくつか分かった事はある。まず一つ、『この世界は大きくても東京ぐらいの大ききさしか空間が存在しないこと』

「限られた広さしかない世界ってことですか？」

「お前が言う『特異点』というやつかもな。次に二つ、『幾つかの建造物が経年劣化として残骸跡がある』。これに関しては幾つか推測が付く」

「何処かで見たことのある残骸って…」

「そして三つ目、俺達が目指すのは向こうにあるあそこだ」

「あそこって……」

響一郎が示した方向に目を向ける。

視界に見えてきたのは、一本の大きな巨大な塔。塔の先端の上には巨大な城が魔法陣の上に建てられていた。

魔術師でない立香にとってもおかしいといえる異変で、なぜあのようなものがと疑問符を浮かべつ。

「大きな城？」

「あそこには唯一、魔力を感じる。それも大量の黒いサーヴァントを無尽蔵に出してくるほどの大量にな」

「じゃあ、この状況を作っている誰かがいるとすれば、あの城にいるってことに？」

「そういうことだ。このまま敵が俺達を放っておくとは思えない。その前に殴り込みに行く」

響一郎はそう言いながら、アクセルを踏みトライサイクロンの速度を上げていく。

今いる戦力は頼りない自分と、仮面ライダーである響一郎の一人だけ。せめて後二人

ぐらい

そんな最中、立香はふと「あること」に疑問を抱き、響一郎に訊ねてみた。

「ところで、響一郎さんって気になっていたんですが、どんな人なんですか？」

「どんな人って？」

「その、変な話なんですけど……俺の知ってる限り、『仮面ライダーはTVの中だけの存在』なんです」

「ほう……ソイツは興味深いな」

立香の思いつかない問いかけに眉を潜める。

アサシンとの戦闘の後、立香は既視感の正体を思い出した。

それは自分のいた日本では「仮面ライダーはTVドラマとして放送されていた」。つまり架空の存在だ。

もしも「キミ達は空想の存在だ」なんて言われたら、少なくとも気分をよくしないだろう。

しかし、意を決して恐る恐る尋ねた立香に対し、響一郎は口から笑いを吹き出した。

「驚かないんですね」

「簡単な話だ、俺の生まれた世界が『仮面ライダーが実在する世界』、立香のいた世界が『仮面ライダーが空想上の存在として語られる世界』だった。それだけの話だ」

「なんだか不思議な感じですね、別の世界だけど『仮面ライダーは実在した！』なんてこ

とがわかったなんて」

「むしろそつちが驚いてるかな」

目を丸くする立香に響一郎は簡単に説明し笑い飛ばしながらトライサイクロンを走らせていく。

向かうは塔の上に鎮座する謎の城。そこにこの特異点（せかい）の原因が分かる…。だがそこへ、行く手を阻むかのように銃撃が迫りくる。

咄嗟に気付いた響一郎がハンドル操作で直撃を避けると、トライサイクロンを急停止。

襲撃者の正体を確かめると、二人の現れたのは……三騎の英霊。

黒の外套を纏い、極端に短い白髪に二丁の拳銃を構えた黒い肌の男。魔獣じみた甲冑を身に纏い痛々しい程に刺の生えた槍を携える凶王。

漆黒の鎧に禍々しい光を放つ聖剣の黒騎士。

立ち塞がった三騎のサーヴァントを見て、立香は驚いた。

「あれはまさか……！」

「知ってるのか、立香？」

「ええ……でも、そんな、まさか……！」

彼らの姿を見て、かつての【彼ら】の事を思い返す。

二丁拳銃の男は、ある錬鉄の弓兵が「悪の敵」として堕ちた【アーチャーオルタ】。魔獣の凶王は、クランの猛犬と謡われる英雄が「最悪の王」として歪められた【バーサーカーオルタ】。

最後の黒騎士は、かの騎士王の「冷酷な君主」としての一面を浮かばせた【セイバーオルタ】。

かつては強大な敵の一人として立ち塞がり、時には仲間として戦ってきたサーヴァント達だ。

今回の三騎が自分達を狙う敵としてやってきた事をなんとなく理解できた立香は少しビビるが、トライサイクロンから飛び降りた響一郎が恐れずに歩いていく。

「何処の誰だか知らないが、一つ教えてやる。この俺をそこら辺の奴らと一緒に見ていると、痛い目見るぞ」

「響一郎さん!?!」

「問題ないさ。——変身! トウツ!」

響一郎は立ち止まると、左腕を斜め上に構え、右手で右腰のエナジーコンバーターを押し込み、タイフーンを起動。

そのまま両腕で円を描き、右腕をL字に構え同時に左手で左腰のエナジーコンバーターを押し込み、タイフーンの風車を回転。

そして高く跳躍し、黒い羽根と共に舞い降りて着地したのは…。

——仮面ライダー3号、響一郎が変身した「歴史の闇から現れた仮面ライダー」。
3号への歩みから駆け出しへ変わり、強く握りしめた拳を勢いよく殴りつけた…。

「——ハア！」

「おっと…！」

まず先に動いたのは、セイバー・オルタ。

迫ってきたパンチを剣でいなし、その回転の勢いに体重を乗せ切り伏せる。

並の相手だったら既に真つ二つになっていた一撃を、3号は後ろへ飛びのいて避ける。

だがそこ銃弾が掠り当たり、次の瞬間銃撃が襲い掛かった。

「銃弾…あの黒い銃の！」

「ふん…ハア！」

刃を取り付けた二丁拳銃をアーチャーオルタは再び銃弾を繰り出してく。

3号は飛んでくる銃撃を掻い潜り、間の距離を詰めていく。

「流石に3人相手だときつい…!!」

殴りかかろうとした瞬間、嫌な殺気を感じとつて避けた。

その直後、激しい赤い一撃が先程まで3号がいた場所を抉り取る。

ミサイル弾頭の如き軌道を描きながら赤一撃を放ったその槍——ゲイボルグは主の手元へ戻り、今度はバーサーカーオルタが自ら襲い掛かる。

「おいおい、マジか……タア！」

槍捌きを回避しながら3号は拳による一撃をバーサーカーオルタに叩き込んでいく。

しかし、大半の攻撃は回避や防御され、まともに顔面に当たったかと思えば不敵な笑みを浮かべて反撃の応酬にかすめとる。

三騎のサーヴァントの異様な不気味さを感じ取った3号はいったん距離をとり、マスタアの傍まで戻ってくる。

「大丈夫かライダーー！」

「ああ、まだな。しかし、久しぶりに苦戦する相手に会おうとはな」

「あの三人の事は知ってる。三人とも一筋縄ではいかない……下手すると、こっちが負ける」

「流石の俺でも他のライダー相手立ち回ればよかったんだがな……」

仮面の裏で不敵な笑みを浮かべる3号だが、立香は嫌な予感を感じ取る。

彼ら三人を相手するのには一筋縄ではいかない……このままでは3対1でこちらが不利になるだろう。

しかし有効打にできる礼装を持っていない今の状態では、まともに変えられない。

せめて、戦闘特化のサーヴァントがこちらにもいれば……。

「立香、伏せろ！」

「ええ、……うわあ!？」

3号の呼ばれ、立香は自身へと走り寄るセイバーオルタに気が付く。

セイバーオルタが黒く染まった聖剣を振り下ろそうとした瞬間……遮るように強烈な火柱が吹き上がる。

業火に吹き飛ばされるセイバーオルタ、代わりに立香の目の前に現れたのは、漆黒に衣装を身に着けた一人の少女。

「何してんのよ、黒騎士さま方。敵対するならまだしもお人形同然の状態なんて滑稽すぎて笑っちゃうわよ」

「君は……」

「また会ったわね、何度目かしら……まあいいわ。話はあとよ」

少女は自分をよく知る立香に対し、呆れにも似た笑みを浮かべながら敵に向き直る。

すぐ傍では3号がバーサーカーオルタと交戦しており、ギロリとした視線を向けて悪態をつく。

「なに? コイツがどんな土壇場で呼んだサーヴァントなのか顔拝みに来たけど、アンタもフルフェイス野郎なの」

「トウー……随分な言い口だなお嬢さん」

「フン、アンタのような男なんざ一人で十分なのよ」

3号を鼻で笑う少女は、竜の紋章があしらわれた旗を靡かせる。

向ってきたセイバーオルタを腰に携えた剣で切りつけ、高らかに名乗り上げる。

「我が名はジャンヌ・ダルク・オルタ、憎悪と復讐に燃やすアヴェンジャーのサーヴァントよ！」

ジャンヌ・ダルク・オルタ、とある特異点で聖杯を基に生まれた特殊なサーヴァント。

かつては敵同士だったが、とある事件がきっかけにより呼びかけに応じた仲間のサーヴァントとなった。

特に因縁のあるセイバーオルタと激しく対峙する。

遠くの方で狙うアーチャー・オルタ。立香を狙撃するべく銃の引き金を引く。

誰も相手に気を取られマスターが無謀な状況に気づいていない中、真つ直ぐ向かう銃弾は数ミリ迫りくる。

いよいよ立香に着弾する……その前にその姿は掻き消え、銃弾は空を切った。

「おっと、残念だったな錆鉄。あのマスターはこつちが回収させてもらった」

「ツ!!」

驚くアーチャーオルタの背後の方から現れたのは、マゼンタを基調とした仮面の戦士。

鬼のように歪んだ緑の複眼を持つソレの横には、抱えられた立香の姿があった。

「どうしたどうした、揃いも揃った英雄達が新参者に負けてるなんざおかしい話だ」

「え、これどういう状況!? てか、ピンクの仮面ライダー……!?」

「マゼンタだ。三原色のシアン、イエロー、マゼンタで有名なマゼンタだ。そこらへん間違えるなよ、少年」

一瞬の戸惑いに驚くマスターを適当にあしらう仮面の戦士は一枚のカードを取り出し、3号とジャンヌオルタに対し叫んだ。

「ジャンヌ! 3号! ここから逃げるぞ!!」

「ハア!? これからって時に!」

「…なんだか知らんが、策があるのか。乗ってやる」

【FINAL—ATTACK—RIDE! DE—DE—DE—DCADE!】

無数の光のカードが展開し、三騎のサーヴァントを捉える。

仮面の戦士が放った銃の一撃が光のカードをくぐりながら加速し、近づいていく。

セイバーオルタ、アーチャーオルタ、バーサーカーオルタはそれぞれの宝具を発動する。

「エクス…カリバー!!」

『UNLIMITED LOST WORKS』

「ゲイボルグツ!!」

騎士の放った漆黒の聖剣による黒い光の剣撃。

銃から放たれた一発の魔弾。

本来より強化された投擲による魔槍。

それぞれの必殺の一撃により、仮面の戦士の放った『ディメンションブラスト』を打ち砕いた。

やがて爆風が晴れると、そこに四人の姿は何処にもいない。

「……」

アーチャーオルタが無言のまま先程の仮面の戦士がいた場所を見つめる。

やがて興味がなくなったように視線を戻し、他のサーヴァント達と共にこの場から去って行く。

別方向に逃げた立香達と4人。廃墟の中でまだ小奇麗そうな場所を見つけ、そこに身を隠すことになる。

状況が落ち着き、立香はジャンヌ・オルタに話しかけてくる。

「ジャンヌ・オルタ！来てくれていた」

「あーら、マスター。なーに何処の馬とも知れない奴を引き連れてんのよ」

「いたたたたたた…」

ジャンヌ・オルタは睨み付けながら立香の両頬を捻る。

3号と共に行動していた彼の事をよく思っていなかったのか、しばらくそのやり取りを繰り返す。

その一方で3号の仮面を取った響一郎がマゼンタの仮面の戦士と話し合っている。

「ところで、お前は一体誰なんだ」

「ん？おれか？ご存じないってか」

「姿形だけなら似た存在を知っているが、どうにも別人に思えてな」

「別人か……まあ強ち間違いでもないし、名乗らせてもらうか」

そういうと、仮面の戦士は1枚のカードを取り出した。

そこに描かれていたのは自分と同じ姿の仮面ライダーで、名前には『DECADE』と

書かれている。

何処か納得したような顔を浮かべる響一郎を不敵な笑みを示すと仮面の戦士は声を張って言った。

「通りすがりのサーヴァント、——真名【仮面ライダー】。あえて言うなら【ディケイド・オルタ】とでも名乗っておこう。覚えておけ」

第3話

某所。

ローブを纏ったその男は部屋の中に積み上げられた物体を眺めていた。白い骸骨によつて積みあがったソレはまるで死神が作った器のようだ。

男はほくそ笑みながら口を開いた。

「面白いものだ、サーヴァントというのは……」

その物体から這い出てくる影から漏れ出し、人型の異形へと形成されていく……。

やがて『シヤドウサーヴァント』と呼ばれるソレになると立ち上がり、建物の外へと向かつていくその光景にニヤリと笑う。

「人類史に刻まれた偉人・英雄が英霊として昇華され、その一面を使い魔として扱う……」

男は立ち上がり、思い返す。

かつて野望の後一步の直前にて「とある仮面ライダー」の前に倒され、敗北に散った自身は時空の狭間を彷徨った。

いつ消滅するか分からない自身がどうにか生き永らえる方法を探していた。やがて

男が見つけたのは、『一つの世界』。

そこは時間の歪みによって生まれた世界が元の形に戻る際、一部が廃墟となって繋がった世界だった。

人がいない世界へたどり着いた男は、そこで繋がったとある異世界にある『サーヴァント』という存在を知ったのだった。

サーヴァントは男にとっては好都合だった。

すぐさま手持ちの技術を応用して疑似的ながら英霊召喚に成功。男は魔術師のサーヴァント・キャスターとして蘇った。

今ではセイバー・オルタ達三騎の黒化英霊を召喚に成功し、自らの野望のために使役し続けてきた。

「いい、実にいい。これほど素晴らしい『兵器』がどこにあったか！コイツらならば、！」
ローブの男——キャスターはそう高笑いを上げながら、魔法陣を呼び出してある物を取り出す。

その金色に輝く物体は、立香がよく知る聖杯だった。

ジャンヌ・オルタとデイケイドオルタを加えた4人は焚火を中心に囲んでいる。

ライダーの姿から変身を解いた響一郎とデイケイド・オルタは、

ジャンヌ・オルタは響一郎を見ながら忌々しく呟く。

「まったく、ライダーのサーヴァントがアイツと同じ類だったとはねえ……」

「やれやれ……お褒めにいただきありがとうございますと言っておくよ、アヴェンジャー」

「お互い初対面のはずなのに、」

「いいえ、別に？ たーだどこかの誰かさんの同類つてのが気に入らないだけよ」

「そこまですておけ。他人に当たるのはどうかと思うぞ」

不機嫌な彼女にそう宥めるのはフードを目深に被った青年。

その青年——人間時のデイケイド・オルタはジャンヌ・オルタに飲み物を注がれた

マグカップを渡す。

『一体何処から取り出したのか』と考えがよぎりながら立香は受け取ったマグカップを

口に含む。

「どうだ？ 美味いか？ 美味いだろう」

「鬱陶しい！ 黙ってなさいよ仮面野郎！」

「お前の熱はちと危険だなあ。おれに妬いてくれるのはある意味心地いいが」

「チツ、なによ涼しい顔してイラつかせるわね」

デイケイド・オルタがフードの奥で笑っている事にジャンヌ・オルタはイラつき、舌打ち交じりに悪態をづく。

彼女を他所にデイケイド・オルタは立香の方へ視線を向けて、彼に尋ねる。

「確か藤丸立香だったか、お前はおれ達に関していくつか訊ねたいことがあるんだろ？」

「は、はいそうです」

「大体わかった。まずおれとジャンヌ・オルタは君の味方で間違いない」

「少なくともあのサーヴァント達と敵対しているという点では俺達と一緒ですね」

「まあな。おれ……いや、おれ個人の目的としてはこの世界を広げる黒幕をぶったおす事だ」

「一体なんのためにだ、デイケイド」

今まで黙っていた響一郎が口を開く。

「やれやれと言いながらデイケイド・オルタは続けて話を続ける。

「はつきり言おう。この世界を放っておくと大変なことになる」

「どういうことだ？」

「ここを巣食っている奴によって別の世界……予測だけど藤丸立香の世界、もしくは近しい並行世界が侵蝕されるのさ」

「侵蝕されるってこの世界にか？ 一体何が目的なんだ…」

「アイツにとつて都合のいい世界に塗り替えるのさ。それも魔術師のような常人じゃない奴らでも対処しようがないようにな」

立香とジャンヌ・オルタに向けて放ったディケイド・オルタの言葉に驚愕を受ける。

「魔法……いや違うな、お前達の世界じゃ魔術と魔法は別物だっけか。それらを行使する魔術師がいるのはご存じかな」

「うん、まあ……」

「——もしも、世界中の人間が魔術師だった世界を生み出すと、としたらどう思う……」

「ええ!?!」

「ちよつと待って、んなバカな事できるわけないでしょ?」

驚きの声を上げ、ジャンヌ・オルタは否定する。

そもそも立香の知る魔術の世界は『神秘を秘匿すべきもの』で『迂闊にその神秘を一般人に触れさせてはならない』。

魔力を用いて人為的に神秘・奇跡を再現する術は、魔術師の最大目的『根源へと至る事』への最大の道。

だが、大勢に知られてしまえば魔術師が学ぶ価値がなくなってしまう。

ゆえに、魔術世界とは神秘であり、神秘であり続けるから魔術として存在できるとい
う……。

だから世界中の人間が魔術師の世界という最大の矛盾などありえない。

だがその既成概念をぶち壊してくるようにデイケイド・オルタは説明する。

「残念ながらアイツが持つている力はそんなでたらめな願いさえ叶えられるんだよ。今のアイツには」

「アイツ？敵の正体を知っているのか？」

「サーヴァント・キャスター……頭も回るし力もある厄介な奴さ。アイツは事実上科学より魔術が文明として進歩した世界を作ってしまった」

「キャスター……魔術に通ずるサーヴァントか。それが俺達の敵か」

響一郎は飲み物を啜り一息をついてからやれやれ、というふうになく笑った。

ガラスが既に砕かれた窓の向こうに立つ塔を見やりつつ、デイケイド・オルタは決意の目をしながら呟く。

「止めなくんちやならねえんだよ。この霊基（からだ）がそう叫んでるんだから」

「……ともかく、藤丸立香の世界に悪影響を及ぼすことは分かった」

飲み物を飲み終えた響一郎が口を開く。

やれやれと言いながら彼は、デイケイド・オルタに近づいて聞いたです。

「だが一つだけ分からないことがある。お前たちの目的だ」

「俺の目的？聞きたいのか？」

「無駄よ、ライダー。そいつははぐらかすの上手いから本音は聞くのは至難の業よ」

「酷い言いようだなアヴェンジャー……ということ、そこは突っ込まないでくれると助かるよ」

「おい、そういうわけには……」

ジャンヌ・オルタの横槍も気にせずデイケイド・オルタに響一郎が聞いただそうとする。

そこに両者の割って入ったのは今まで黙っていた立香だった。

「とーにかーく！ 状況はなんとなくだけど分かった。このままほっといたら悪い奴の思い通りになっちゃうのは」

「どうするんだ、藤丸立香」

「多分、誰かが不幸になるのは確かだ……だから俺はキャスターの企みを止める」

「随分と決断が早いな」

「俺ができることって、このくらいしかないから」

苦し紛れの笑みを浮かべる藤丸立香。

その様子を響一郎はやれやれとため息をつきながら笑って返す。

「ははっ、んじゃあ決まりだな。やってやるか」

「ふん……で？ どうするの？ 敵に見つからずどうやって行くの？」

「そりやまた何故」

「何故つてアンタねえ！ただでさえシャドウサーヴァントがいるくせに」

「なあに、仮面ライダーはサーヴァント（そっち）と負けず劣らずトンデモ具合はすげえよ」

ジャンヌ・オルタの言葉に対してディケイド・オルタはある一枚のカードを取り出す。そういつてディケイド・オルタが掲げたカードには『牛を模した緑の列車』の姿があった。

巨大な塔の上に建てられた城、この特異点を維持しているキャスターはその内部にいる。

かつて自身の野望の暗躍するために仕えていた城・エメラルド城と酷似させており、かつての敗北を思い出すようだと言っている。とキャスターは思う。

あの時と違うのは、王に仕えてる大臣ではなく強大な英霊を従える王として君臨している。

「忌々しいが今は違う。今はサーヴァントという心強い使い魔がいるからな」

キャスターの手元にはセイバー・オルタ、アーチャー・オルタ、バーサーカー・オルタの三騎士が控えている。

反転しながらも正規の英霊である彼らならば、まず負けはしないだろう。

彼らに劣りながらもシャドウサーヴァントも散らばって位置しており、簡単には近づけはしない。

「さあ、やってみせろ。やれるものならな」

ニヤリと口角を釣り合上げるキャスター。近づけさせない自信があるからだろう。

もつともその自信が打ち砕かれるのが

まず気付いたのは城の下の塔に散らばっていたシャドウサーヴァント達。

少しの地鳴りの後、何かを削るようなような機械音が響き渡る。

やがて轟音と共に地面の下から現れたのは、巨大なドリルを持った二両編成の列車。

ライダーカード【ATTACK—RIDE ZERO—RIDER】によつて呼び出された仮面ライダーゼロノスが所有する時の列車【ゼロライナー】を駆るディケイド・オルタは、ジャンヌ・オルタに文句を入れながらマシンゼロホーンを操縦する。

「ハイヤアアア—!!」

「ちよつと！ディケイドオ！こんなのありなの!？」

「ハッ！もうちつと柔軟になれ！このくらいの無茶じゃないと英霊どもになめられるか

「！」

「だからって地面を掘って近づくと無理やりすぎるわ!!!」

途中で襲い掛かるシャドウサーヴァント達を蹴散らしながら城へと目指していくゼロライナー。

その背後を追って3号と立香が乗るトライサイクロンが、ゼロライナーから離れまいと走る。

「行くぞ、藤丸。フルスロットルで行くぞ」

「大丈夫、うん大丈夫だ……!」

「どんな英雄だろうがただでついてこれるとは思うなよ」

「いつてくれ、ライダー!!」

加速度を上げていくトライサイクロンはゼロライダーの後に続いて向う。

そのあとを追って戦車に乗ったシャドウサーヴァント達がトライサイクロンを狙う。車体をスピンさせ、ガトリング砲を乱射して薙ぎ払っていく。

シャドウサーヴァントを蹴散らしていく様子を見て、キヤスターはニヤリと笑う。

「また阻むか、仮面ライダー……いいだろう! まだまだ私を楽しませるか! いけっ!」

キヤスターの命令に従い、跳びあがって向った三騎のサーヴァント達。

塔を上がつていくトライサイクロンとゼロライナーに対し、それぞれの攻撃が仕掛け

ていく。

「うわっ！」

「しがみ付いてろ藤丸！さらに飛ばすぞ！」

アクセルを踏み、ゼロライナーを追い越してさらに加速していくトライサイクロン。

一方、ゼロライナー内部にいるデイケイド・オルタはジャンヌ・オルタを無理やりひっ掴まえて、新しいカードを装填する。

「掴まれジャンヌ！」

「ちよつと待ちなさいってきやあ!？」

【ATTACK—RIDE!GATACK—EXTENDER!】

ゼロライナーから飛び出したデイケイド・オルタらが乗るマシンゼロホーンは、今度
は仮面ライダーガタツクの愛機である青いバイク・ガタツクエクステンダーへと姿を変
える。

ガタツクエクステンダーはバイクの姿からサーフボードの形になったエクスマード
に変形し、飛行能力で飛んでいく。

城から降りてくる三騎のサーヴァントに気付くと、新しいカードを装填する。

「おい、3馬鹿。お前らの相手はこっちだ!!」

【ATTACK—RIDE!KERBEROS!】

デイケイド・オルタはG3-X専用のガトリング式機銃・ケルベロスを手につくと、それを三騎士目掛けて引き金を引いた。

無数の弾丸が発射され、サーヴァント達に向かっていくも効き目が薄い。

三騎相手に大立ち回りを繰り広げる二人に対し、

「ジャンヌ！デイケイドさん！」

「行きなさいよ、マスター！」

「……わかった！無事でいて!!」

トライサイクロンはそのまま塔を駆け上がり、城へと向かっていく。

彼らを見やりながら、デイケイド・オルタは呟く。

「別に言ってもよかったんだぜ？ジャンヌ」

「ふん、3対1じゃあ負けるくせに何言ってるの」

「お優しいこった。ありがたい限りだよ」

皮肉交じりに笑うジャンヌ・オルタにため息をつくデイケイド・オルタ。

三騎が武器を構えながら迫る中、二人は走り出した。

城にたどり着いたトライサイクロンは城壁をぶち破り、最深部へと到達する。そこにあつたのは白い骸骨によって積みあがった器のようなもの。

藤丸立香はそれを見開き、驚く。

「なんだ、これ……」

『『タナトスの器』、膨大な魔力の貯蔵を可能とする魔術道具だ』

「……!!」

振り向くと、そこにいたのはロープの人物——キャスター。

立香をかばって3号が出ると、拳を前に出しながら構える。

「お前がキャスターか。何故こんな回りくどいことをする」

「回りくどいだと?」

「お前、こつち側の人間だろ。わざわざ二度も同じことをして」

「ああ、そういうことか。つまり同郷というべき人間ということか、ライダー」

そういつてキャスターはロープを外すと、そこに現れたのは一体の怪人。

かつて【オーマ大臣】として魔法の国として暗躍して、住人すべてを怪物・ファントムとして変貌させようとした存在。

巨大な鱗をその身にまとう金色の竜のファントム・ドレイク、それがキャスターの正体である。

「魔力の塊であるファントムの私は、クラスキャスターのサーヴァントとして、『復活』した」

「正直、私は運がよかったよ。あの魔法使いに倒されて消えていくはずだった幻想がこんな形でチャンスを掴ませてくれるとは」

「妄執と狂気しかないあの世界の人間にとつて、これほどの策謀は防ぎようがないからな」

ファントム・ドレイクの語り、立香とは構える。

このままにしておけば、いずれ誰かが泣くことになる。それだけは避けたかった。

強大な敵の前に震える立香の前に、3号は訊ねる。

「どうするんだ？立香……不安か？」

「ああ……だけど、そんなの見過ぎせない。《まだ、俺はあの世界を取り戻せてはいない》！」

「だったら戦えないお前の代わりに俺が戦う」

「……ありがとう、ライダー」

立香の答えを聞いて一歩踏み出す3号。

右手首を左手で抑え、力を振り絞りながら走り出していく。

「立香の世界を……塗り替えさせはしない！」

第4話

「ハア!!」

「又ウン!」

まずぶつかりあったのは、3号が繰り出した拳とファントム・ドレイクの振りかざした大剣・タイラントの攻撃だった。激しい金属音が響き渡り、両者はいったん離れると次の一撃を叩き込むために再び近づく。

3号は右フック、左ストレート、右足回し蹴り、左足前蹴りといった格闘攻撃を披露していく。一方、ファントム・ドレイクはそれらをタイラントで捌いていくと、強烈な一撃を3号へ向けて斬り放った。

「食らえ!」

「ぐあつ!」

「ライダー!」

強烈な一撃を叩き込まれた3号は軽く吹っ飛び、地面へと叩きつけられる。

マスターである立香は安全を考慮して少し離れた所の隠れており、迂闊に手出しはできな

その立香にタイラントの剣先を向けたフアントム・ドレイクは嘲笑しながら鼻で笑った。

「おっと、出てきていいのかな。誰とも知らぬマスターよ。真つ先に斬られるのはいつも弱いものからだ」

「ぐっ……」

「ふん、どうせ消えるのはサーヴァントでもマスターでもどっちも一緒だ。ならば私は楽な方をとらせてもらう」

フアントム・ドレイクはそういうと、タイラントを構え立香へ迫り始める。

戦闘能力を持つサーヴァントならまだしも、一般人である立香では怪人に対抗できる手段はない。

死が目の前に近づくその時、フアントム・ドレイクの背後から手刀が振り下ろされる。

「——させるかっ!」

「なに?」

「ライダー…:チョップ!!」

3号が放った必殺の手刀【ライダーチョップ】。かつて伝説の1号ライダーが使った必殺技の一つであり、本来初代仮面ライダー達を倒すために作られた3号にとっては組み込まれた技と言えるだろう。

咄嗟にタイラントで受け流すも、あまりの勢いにタイラントは弾かれてしまい遠くへと投げ出されてしまう。

「チツ、どうやらなかなかやるではないか!」

「これでも一応はサーヴァントでな。少なくともマスターを守るのは当然だろう」

「ふん、戯言を……少しは面白くなってきたではないか。そうでなくては楽しみがない!」

不満そうな態度から余裕を取り戻すと、ファントム・ドレイクはあるモノを差し出す。それは、手形のデザインがされた大きなドライバーで、ドレイクは腰辺りにそれをつける。

3号は既視感を感じ、そしてそれが『かつて戦ったことのあるライダー』の物と酷似していた事に気づくのはすぐだった。

「それは……まさか貴様も!」

【シャバドゥビタッチヘンシーン、シャバドゥビタッチヘンシーン】

【チェンジ・ナール】

「——変身!」

黒色の指輪・チェンジウィザードリングを変身ベルト・ワイズドライバーに翳すと、魔法陣が出現。

魔法陣がファントム・ドレイクの体を潜り抜けるとそこに現れたのは金色の魔法使い。

背中のマントを広げ、高らかに名乗り上げた。

「サーヴァント・キャスター、改め仮面ライダーソーサラ……さあ、お楽しみはこれからだ！」

仮面ライダーソーサラ。

かつては魔法の国を作り上げ、魔法使いの住人全員を魔物・ファントムに仕立て上げるために暗躍していた悪しき魔法使い。

一度はとある魔法使いによって倒されて野望は阻止されたが、度重なる奇跡と偶然を以て再びその姿を現した。

【ATTACK—RIDE!BLAST!】

「ぶっ飛べ！」

デイケイド・オルタの「アタックライド ブラスト」による射撃が、三騎士達に叩き込まれる。

その猛攻の間について近づき迫ったジャンヌ・オルタが炎を翳して攻撃を仕掛けた。

「ぶつつぶれなさい!」

「グツ!」

ジャンヌ・オルタの炎を避けながら後退するセイバー・オルタ。

彼女と入れ替わってバーサーカー・オルタがジャンヌ・オルタの相手を、その後方はアーチャー・オルタが援護射撃をディケイド・オルタに対してお見舞いする。

相手の統率の取れた連携にディケイド・オルタは応戦しながら舌打ちをする。

「チツ、こうまで厄介とは……こいつら、仲良すぎなんじゃねえのか!」

「そんな事は本来の本人達に言うのね!もつとも嫌な顔されるだけだろうけど」

「犬猿の仲ってやつかよ畜生」

ディケイド・オルタは新たなカード「ATTACK—RIDE TORNADO」を装填。

仮面ライダーカリスが持つラウズカードの一つ『ホークトルネード』の力をライドブッカーに宿し、引き金を引くと巨大な風の渦が巻き起こる。

風の渦は竜巻と化し、三騎士の身動きを封じる。

その隙に物陰へ避難した二人は、倒すための対抗策を練っていた。

「さて、どうするかな。対抗策はあるかい」

「ないわよ。そんなもの。そういうアンタは考えてるの?」

「あるぞ」

「ふん、ほら見なさい、アンタが思いついてるなら私だつてとづくに思いついて……え？」

待っていた答えと予想外な答えに素つ頓狂な声を上げるジャンヌ・オルタ。

デイケイド・オルタは彼女に何枚かのカードを見せる。

それは、デイケイド・オルタが使ってきたアタックライドとは別の種類のライダーカードのようだ。

見たこともないカードにジャンヌ・オルタは首をかしげるが、デイケイド・オルタは余裕綽々と話す。

「とっておきだ。俺自身の宝具と言ってもいいかもな。そいつをここで開帳する」

「アンタの宝具ですって……?」

「ま、サーヴァントを一気に仕留めるには手数不足なんだがまあ大丈夫だろう」

「チツ、何が大丈夫なのよ? 根拠あるの?」

「なあに。おれとお前がいるんだからだ、ジャンヌ」

「ふざけんじやないわよ! ああもう口説くならもうちよつとマシな格好しろ!」

顔を赤面しながら拳をぶつけるジャンヌ・オルタを、デイケイド・オルタは軽くあしらう。

その直後、三騎の取り囲んでいた竜巻が斬撃によつて吹き飛ばされ、そこからセイバー・オルタが這い出てくる。

「さてと、そろそろ逆転の一手をやるか」

「フン、なら任せませうか。デイケイド・オルタ」

ジャンヌ・オルタは不敵な笑みを向けると、セイバー・オルタ相手に腰に携えた剣を引き抜き、炎を纏わせて飛び掛かる。

その一方、デイケイド・オルタはアーチャー・オルタとバーサーカー・オルタと対峙し、彼らに対して先程のライダーカードを取り出す。

「よく見とけよ。これがおれの宝具《とつておき》だ」

デイケイドライダーにその「黄金色の無敵の戦士」のカードを装填する。

【FINAL KAMEN RIDER! EX-AID MUTEKI GAME AR
ー！】

【輝け！流星の如く！黄金の最強ゲーマー！ハイパームテキエグゼイド!!】

黄金色の流星がデイケイド・オルタの姿に纏わりつき、その姿を別のライダーへと変えていく。

その姿は流星を思わせる金色の戦士。

『仮面ライダーエグゼイド ムテキゲーマー』となったディケイド・オルタはバーサーカー・オルタへ指を指して言い放った。

「テメエにはこれがお似合いだ。さあ、ここからは逆転ゲームでクリアと行こうか！」
「チツ…!!」

挑発と言わんばかりの言葉に舌打ちを曝したバーサーカー・オルタは得物の朱槍・ゲイボルグを構え、飛び掛かる。

Dエグゼイドはライドブツカー・ソードで防ぎつつ、拳を突き出して応戦。

暫く剣と槍、素手と素手のぶつかり合いの末にDエグゼイドがムテキゲーマーの力を込めたライドブツカーによる斬撃を放った。

「どっせいー！」

——ガキヤアアアアン!!

「なっ……!?!」

「これで自慢の武器がなくなっただな！ゲイボルグがなくなればこっちのものだ！」

エグゼイドの攻撃によりゲイボルグは真つ二つに折られ、光の粒子となって消えていく。

相棒というべきいよいよ後が無くなったバーサーカー・オルタは構えを取る。

彼の体から発生した闇が彼の体に纏わりつき、漆黒の魔獣のような外骨格へと変化し

ていく。

「全呪解放、加減は無しだ……ここまでしてくれたんだ。この絶望砕いてみるー！」
「喋れたのか、お前……まあいい、だったらー！」

Dエグゼイドは金色のエンブレムが描かれたカードをデイケイドライバーに装填。

互いが互いに必殺の一撃を決めるために、その身に力を溜めていく。

やがて、力が溜まり切ったとき、両者は相手を仕留めんと必殺の一撃を繰り出した。

「——噛み砕く死牙の獣《クリード・コインヘン》！」

【FINAL—ATTACK—RIDE！E—E—EX—AID!!】

【キメワザ・ハイパークリテイカルスパークキング！】

「ハアアアアアア!!」

パーサーカー・オルタの繰り出した「噛み砕く死牙の獣《クリード・コインヘン》」による刺突の一撃と、Dエグゼイドの繰り出した必殺キック「ハイパークリテイカルスパークキング」。

両者の放った技はぶつかりあい、その余波が周囲のものを吹き飛ばしていく。

今にも内側から食い破らんと突き貫こうとするアーマーの棘がいくつも分裂し、Dエグゼイドへと迫り行く。

だが、Dエグゼイドの蹴りの勢いは止まる気配はなく、それどころか勢いがどんどん

増していく。

「うおおおおおおお!!」

黄金の流星のような一撃がバーサーカー・オルタの纏う『噛み砕く死牙の獣（クリード・コインヘン）』を打ち砕いてゆく。

そして、バーサーカー・オルタの体にDエグゼイドの連続キックが叩き込まれた。

【H I T T !】 【H I T T !】 【H I T T !】 【H I T T !】

【H I T T !】 【H I T T !】 【H I T T !】 【H I T T !】 【G R E A T !】

【P E R F E C T !】

「これでフィニッシュだ!!」

【究極の一発!完全勝利】

Dエグゼイドの必殺の蹴りを受けたバーサーカー・オルタは、爆発を起こしながら散っていく。

その去り際の顔は僅かながら、笑っていたように見えた……。

だが、バーサーカー・オルタ撃破から間髪入れず銃撃が降り注ぎ、Dエグゼイドを襲う。

アーチャー・オルタが二丁拳銃を合体させ、双剣として切りかかっていく。

「チツ……次はお前か！」

「随分と馬鹿な成り立ちの英霊がいたものだ。呆れを通り越して笑えてくるよ」

「お前も喋れるのかよ……！」

双剣から二丁拳銃の形に変えて、近距離射撃を仕掛けるアーチャー・オルタ。

銃口から放たれる銃弾はムテキゲーマーのボディが弾いていくが、それでも猛攻は止まらない。

「ああそうさ。自分が目指していた者が目の前にあると……無償に腹が立つ！おまえにも、己自身にも！」

「てつめえ……」

「お前のせいで嫌でも思い出すよ……かつて俺が抱いていた願いや、そのために犯してきた罪も！」

接敵したアーチャー・オルタが引き金を引き、零距离で銃口から穿たれる極光の銃弾。
【偽・螺旋剣《カラドボルグ・II》】の強烈な一撃により、Dエグゼイドの姿は元のデイケイド・オルタの姿へと戻ってしまう。

「お前はどつちだ……英雄！」

自分より他人が大切だという考えか？。誰もが幸福であってほしい願いなど空想のおとぎ話でも信じているのか？そんな夢を抱いてしか生きられぬのであれば、抱いたま

ま溺死しろ！」

最後の一撃を放たんと、吹き飛んでいくデイケイドへ銃口を向けながら詠唱を始める。

無限の剣製《アンリミテッド・ロストワークス》、着弾すれば内部から固有結界を発生させ、対象の内部から剣が突き出るオルタナティブ化した彼の宝具。当たればサーヴァント相手でも一溜りはない。

一方、強烈な一撃をくらいながらもデイケイド・オルタは態勢を立て直し、何とか着地をすると彼に向けて口を開いた。

「——何を言うかと思えば、答えはもつと単純だけ。名もなき英雄《ノーネーム・ヒーロー》」

「……なに？」

「仮面ライダーつてのは正義のために戦ってきたじゃない、人間の自由のために戦ってきた！」

デイケイド・オルタは新しい一枚のカードを取り出し、ベルトに装填。

それと同時に子供が想像する未来都市のような明るい巨大なステージが出現し、沢山のポトル型アイテムが出現する。

「それでもって愛と平和、どっちも守り抜く！そんなあいつらを否定させたりはしない

ためにおれはここにいるんだ！」

【FINAL—KAMEN—RIDE! BUILD—GENIUS!】

「あえて言おう、ビルドアップ！」

【完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!スゲイ!モノスゲイ!】

デイケイド・オルタの決め台詞と共に、その姿を白を基調とした仮面ライダーへと姿を変えていく。

『仮面ライダービルド ジーニアスフォーム』と変身したデイケイド・オルタは、アーチャー・オルタとの間合いを一瞬で詰めて、片腕で彼の首根っこを掴みながら耳元でささやく。

「覚悟しろ、鎗鉄。こればかりはちつときついぞ」

「なんだとツ!？」

【FINAL—ATTACK—RIDE! B—B—BUILD!】

【ワンサイド!逆サイド!オールサイド!ジーニアスフィニッシュ!】

Dビルドから虹色のエネルギーから溢れだし、アーチャー・オルタ共々二人を包み込む。

それは『感情のエネルギー』、人の強い想いを攻撃力へと変換する感情がエネルギーの奔流となって両者を追い込んでいく。

特にアーチャー・オルタにとってビルドジーニアスの『感情を与える事』のソレは劇薬に等しくその身の著しく削っていく。

「貴様あツツ!!」

「なあに一人寂しくではいかせないさ、地獄の相乗りと行こうか付き合ってもらおうか!!」

Dビルドはさらにエネルギーの奔流を加速させていく。

そして、感情のエネルギーの臨界点は超え、大爆発を起こした。

一方、セイバー・オルタと対決するジャンヌ・オルタ。

自前の剣も折られ、宝具の一つでもある呪いの旗だけを構えて応戦する中、遠くで起きた爆発を感じ取る。

「チツ、アイツ……! やられたんじゃないでしょうね!」

「……………」

「なによ、言いたいことあるなら言え!」

無言のセイバー・オルタにジャンヌ・オルタは業火を再び巻き起こして浴びせようと

するが、叩き防がれて接近を許してしまう。

目の前に迫るは、振り下ろされた反転した黒き聖剣。一太刀浴びればたまったものではない。

(こんな所でやられるわけには……!)

走馬灯のように思い出したのは、分かれる前にデイケイド・オルタから渡された一枚のカード。

銀色の南蛮鎧の仮面の戦士が描かれたそのライダーカードを懐から掴み、念を通す。

すると、セイバー・オルタの聖剣を防ぐように現れたのは二つの武器。

果実の断片を模したバズーカ銃と、日本刀型の銃剣一体武器。

『無双セイバー!』

『火縄大橙DJ銃!』

「——おっらあっ!」

ジャンヌ・オルタは旗をセイバー・オルタの方へ投げつけ、その現れた武器を手にする。

無双セイバーの刀身と火縄大橙DJ銃の銃口を通し、一本の大剣のような形に合体させる。

「まったく、これでダメなら恨むわよ……!」

対してセイバー・オルタは聖剣を構え、光を収縮。黒く染まった光の剣と化し、必殺の一撃を放とうとしている。

狙うは目の前に立つ竜の魔女……！

『『卑王鉄槌』、極光は反転する。光を呑め……！』

「約束された勝利の剣《エクス……カリバー！》」

放たれた光を飲む闇の斬撃が迫る。

先に必殺技を放たれてジャンヌ・オルタは身構える……だが、彼女の傍に立った『銀色の仮面の戦士』が身を挺してエクスカリバーの斬撃を防ぐ。

ジャンヌ・オルタにとって何者なのかは分からないが、今がチャンスと察した彼女は火縄大橙DJ銃 大剣モードを力強く振り下ろした。

『極チャージ！』

「ハアアアアア!!!」

ジャンヌ・オルタの業火と混じった炎の斬撃がエクスカリバーを飛び越えてセイバー・オルタの体に刻み込まれる。

仮面が砕け、その奥の眼が露になってジャンヌ・オルタを捉える。

「フン……一人だけでは無理だったではないか。突撃女め……」

「言ってなさい……今度はどこぞの馬に操られないようにね。アホ毛女」

彼女の毒の入った言葉を聞いてセイバー・オルタは満足そうに消えていく。握っていた武器は空気に溶けるように消えてゆき、ジャンヌ・オルタは仰向けに倒れながら地面に突っ伏した。

「まったく、正義のヒーローなんて柄じゃないわよ……まったく」

「生きていたら。あいつに文句言ってやるんだから……!!」

ジャンヌ・オルタは特異点の広がる空を見上げながら、恐らく生きているであろう『彼』に対してぶつくさつぶやいた。

第5話

地上にて激闘を繰り広げている頃、城の最深部。

黄金の魔法使い・ソーサラーの登場によつて、二人のライダーにより一層熾烈な戦いを極めていた。

【エクスプロージョン・ナウ】

「爆ぜてしまえ！ライダー！」

「とおお！どりやああ!!」

ソーサラーの繰り出した魔力の塊を爆発させる魔法・エクスプロージョンを拳の風圧で打ち消し、鉄拳を叩き込む3号。

しかし、ソーサラーが空間同士を繋げる魔法・コネクトにより呼び出した戦斧・デー・スハルバードにより防がれ、切り裂かれてしまう。

「ぐう!?!」

「まだくたばつてはこまるぞ。こちらには引き出しがいくらでもあるんだかな」

【トルネード・ナウ】

次に竜巻の魔法・トルネードを呼び出し、3号を軽々と吹き飛ばした。壁に叩きつけ

られようとするも3号は足場代わりに壁へと張り付き、高く跳躍して空中へと舞う。

大回転しながら繰り出したのは、かつて仮面ライダー1号が使っていたあの技。

「ライダースクリューキック！」

「なにっ!？」

3号は錐揉み回転しながら相手に飛び蹴りを放つライダーキック『ライダースクリューキック』を披露する。

躲せる余裕もなく真つ直ぐ放たれた技に防壁の魔法・デیفエンドを使ってまで防ぐしかなかった。

「デیفエンド・ナウ」

「くうう!?!小癩な!!」

「デュープ・ナウ」

「ライトニング・ナウ」

デュープにより五体へ分身、さらに5体同時に雷を放つ魔法・サンダーを使用。

5人のソーサラーから放たれる雷撃が3号へと襲い掛かる。

だが雷撃を食らいつつも近づいていき、ソーサラーの傍まで接近するとそのうち二体の体を掴み。

「——ライダー二段返し!!」

「ぐあああ!?!」

3号二体のソーサラーの身体をひっくり返し、他の二体ごと地面に叩きつける。

『ライダー二段返し』により分身だったソーサラーは空気に消えるように消滅し、事前に逃れていたソーサラーは仮面の下で睨み付ける。

「なんなんだその技は!」

「俺は元々1号ライダーと2号ライダーを倒すために生まれた仮面ライダーだ。ダブルライダーに対抗するためにその技を叩き込まれている」

「ハッ、伝説の仮面ライダーか!だが君のようなライダー見たことも聞いたこともない!」

「当然だ。俺は、歴史の中に消えるはずだった仮面ライダーだったからな」

3号は仮面の下で笑いながら、再びソーサラーとの交戦を再開した。

その二人が繰り広げる戦いに立香は息を呑む。

「凄い、これがライダー同士の戦いなのか……」

今までにも様々な特異点にてサーヴァント達を始めとした脅威たちとの戦いを見てきた。

だがそののどれにも負けず劣らず目の前のライダー達の激闘は目を見張るものがあった。

一方、3号に蹴り飛ばされたソーサラーがタナトスの器に近づくと、そこ中へ手を突っ込み何かを取り出した。

——それは、3号に似た顔立ちをしたデザインのワイザードリング。

「さて、そろそろ頃合いか」

「なんだ、それは……」

「いだよ！最強の仮面ライダー！」

「4号・プリーズ」

「ライダーライダーライダー！」

謎のワイザードリングをドライバーに通して発動させると、まず出てきたのは等身大ほどの巨大な魔法陣。

そこから出てきたのは、パイロットスーツのような戦闘服が特徴の謎の仮面ライダー。赤い複眼を輝かせ、3号へ視線を向けると、嬉しそうに口を開く。

「———よお、兄弟。まさかこんな形で会うとはな」

「兄弟？貴様、何者だ」

「仮面ライダー4号、同じショッカーに作られたショッカーライダーさ」

謎の仮面ライダー……仮面ライダー4号の登場に3号は疑問符を浮かべるばかり。

無理もない、3号の存在が消えた後に作り出された仮面ライダーだからだ。

かつて共に戦ったライダー達が苦しめられたことにも、仮面ライダー3号……黒井響一郎にとつて知る由はない。

「生憎、今の俺は仮面ライダーだ。お前のような悪魔の手先と一緒にではない！」
「そいつは残念だよ。だったら……倒すしかないよなあ！」

4号は3号へ向かつて勢いよく殴り掛かる。3号はその拳を止めるも、その勢いを相殺しきれず軽く吹っ飛ばされる。

立香のすぐそばの壁まで殴り飛ばされ、壁にめり込んだ3号に近づいて引き出す。

「ライダー！大丈夫か！」

「マスター来るんじゃない！隠れているんだ！」

「そうはいつでも……！」

「おしゃべりの時間はないぞ」

【ブラスト・ナウ】

3号と立香へ向けて衝撃波を発生させ相手を吹き飛ばす魔法・ブラストを発動したソーサラー。

彼の放ったブラストの一撃が3号と立香に炸裂し、建物を突き抜けて軽く場外まで吹き飛ばされてしまう二人。

すぐさまやってきたソーサラーと4号に追い詰められ、ジリジリと距離を詰められて

しまう。

「アツハハハハハ！よくもまあ頑張ったものだ！ここに健闘したキミ達へ拍手を送りたいよー！」

「所詮はシヨツカーを裏切ったダブルクロス……これまでだ。過去の仮面ライダー」
嘲わらうソーサラーに、サムズダウンする4号。

強敵達かにじり寄るの中、3号の目の前に立香が前に出て彼をかばう。

「いやだ、まだ終わってない！」

「フン、戦えないマスターがよくもまあ吼えるものだ。魔法もこつちの方が腕だ」

「確かに俺は一般人で、俺しかマスターになれる人がいなかったからマスターやってい
る……正直、サーヴァントに頼らなきゃなんにもできない」

「…藤丸立香」

「それでも……」

ソーサラーに鼻で笑われ、3号に心配されようと、彼は立ち続ける。

立香のその眼には夜空に輝く星のような強い輝きが秘めていた。

「俺には戻るべき場所がある！こんな俺でも助けたい人がいる！」

———そうだ、思い出した。

あの時、謎の敵によって崩壊するカルデアから命からがら脱出した。魔術王の企みを終えて、その後起きたいくつもの亜種特異点を巡る旅を終えた俺達に待っていたのは、カルデアの崩壊と、かけがいのない仲間の損失。

正体不明の敵から何とか逃げ伸び、虚数空間へと逃げ伸びた。

その時だ、意識だけがこの特異点にたどりついた。

どうにかして戻らなければ、マシユたちが待っているあの場所へ。

「俺は諦めたくない！俺の心は……止まってない!!」

その時だ、藤丸立香の元から一際眩い閃光が放たれる。

立香が何だと思つて懐を探ると、そこにあったのは一枚のカード。

見覚えのある、確かデイケイド・オルタが使っていたライダーカードと同じものだ。

閃光を放つそのカードは手元から宙に浮かび、何処からか発する声と共に効果が発揮される。

【Drive/Type・Trydron】

突如、赤い閃光が目の前を駆け抜け、ソーサラーと4号を蹴散らしていく。

何かが起こったのかと思っていると、目の前に突然一人の戦士が現れる。

その戦士は倒れている3号に手を伸ばすと彼に話しかける。

「立てるか？3号」

「お前は……！」

3号が見上げるとそこに立っていたのは、車を思わせるデザインを持った赤い仮面ライダー。

ドライブ・タイプトライドロン。

姿形はあの時と違えど、かつてシヨツカーライダーだった自分を救ってくれた男・泊進ノ介が変身する仮面ライダーだ。

ドライブは立香の方を見ると、気さくな様子で彼に話しかける。

「よお、少年。よく頑張ったな。あとは任せろ」

「アンタは……」

「仮面ライダードライブ！警察官だ！」

「……まさか、またこんな所でお前に出会えるとはな」

あの時叶わなかった、3号とドライブの共闘。

今、特異点という未知の領域によってここに実現は果たされた。態勢を立て直したソーサリーと4号が目の前に立ちふさがる。

「ええい、一人増えた所で！」

「何処までも楽しませてくれるか、仮面ライダー！」

「いくぞ、今は俺達がダブルライダーだ！」

「ああ、今度は俺と一緒にひとつ走り付き合えよ！」

ドライブと3号、ソーサリーと4号、2対2のライダー同士の激闘の幕が今始まった。まず最初にぶつかったのはドライブ・タイプトライドロンとソーサリー。

ハンドル剣とデイスハルバードの刃がぶつかりあい、火花を散らす。

少しの間打ち合った後、いったん離れた両者は次の攻撃を仕掛けるために準備をする。

「来い！皆！」

【Come on! Burning solar! Road winter! Colorful commercial!】

【Tire! Kakimaze! ru!】

【Weather report!】

ドライブの左腕に個性豊かな三種類のタイヤがセットされ、胸部左側に一つのタイヤ

へと融合する。

そのタイヤから発せられる強烈な火炎と冷凍の光線がソーサラーに襲い掛かる。

対してソーサラーはウイザードリングによって呼び出した光球を放ち、打ち消そうとする。

「イエス！バニツシユストライク！アンダースタン！？」

「これでジ・エンドだ！」

ソーサラーの「バニツシユストライク」とドライブの「ウエザーリポート」がぶつかり合う。

暫しの間拮抗した後、光球を相殺したドライブは次の一手を叩き込む。

【Come on! MassEUR monster! HulkIng wrecke
r! Decotraveleer!】

【Tiree! Kakimaze~ru!】

【Tough guy】

「——おつりやああああ!!」

「なんだと、ぐああああ!!」

新たな融合したタイヤにタイヤコウカンしたドライブが、リアットの要領で構えた左腕をソーサラーへと叩き込む。

予想外の攻撃に受け身を取る事が出来ず、ソーサラーは吹っ飛ばされてしまう。

一方、3号と4号は互いに格闘メインの空中戦を行っていた。

4号は自身の持つ飛行能力を駆使して、3号は両腰の供えられたコンバーターを噴射させ、空高く飛びぶつかり合う。

やがて必殺の一撃を叩き込みんと拳を相手目掛けて突き出した。

「ライダーパンチ！」

ぶつかりあう両者のライダーパンチ。

しばしの力による競り合いの後、4号が押し通して3号を殴り飛ばす。

だが、3号も負けじと4号の伸ばした腕を掴み、そのまま抱え上げた状態で力任せに投げ飛ばした。

「ライダーア……きりもみシユート!!」

「なにい!?!」

竜巻に巻き込まれたかのように舞い上がっていく4号は脱出もできず、地面に叩きつけられる。

鈍い機械音を鳴らしながら立ち上がる4号は、同時期に生まれたはずの3号に対して驚愕を隠せなかった。

「バカな、何処からそんな力が」

「生憎だったな、それが俺とお前との差だ」

「なに……?」

「ダブルライダーを倒したあの時から、何十年もかけて曲がりなりに戦ってきたんだ。後悔の念に押しつぶされながら」

決意の籠った言葉を言い放ち、拳を振るい放つ4号。

その裏で思い起こされるのはゲルシヨツカーの戦いを終えた1号・2号を倒した自分の光景だった。

自分が犯した罪に長年苛まれながらも、その罪と向き合うためにダブルライダーの技を磨いてきた。

「だから負けるわけにはいかないんだ。あの二人が、仮面ライダーが背負ってきたものを今度が俺が背負うために!」

幾度の拳を混じり合わせ、4号の仮面に拳がめり込み、ソーサラーの元まで殴り飛ばされた。

並び立った3号とドライブ、彼らは必殺の一撃を放つために構えを取る。

「いくぞ、ドライブ」

「ああ、これで決める!」

「ライダーキック！」

「His sa—t su! Full Throttle！」

「どりゃあああああ！」

頭上へ高く飛び上がり、必殺の蹴りを繰り出した3号・ドライブのダブルライダー。負けじとソーサラーは『ストライク・ジエンド』を発動、4号も飛び上がり『ライダーキック』を繰り出した。

ぶつかり合う技と技、互いに火花と衝撃を散らしながら拮抗する両者。

だが徐々にソーサラーと4号が押し始め、徐々に勢いが削がれていく。

このまま撃ち負けてしまうのか……そう思った時、背を向けていた方から声が聞こえてきた。

「——令呪を以て命ずる！勝つてくれ、ライダー！」

物陰に隠れ、今まで見守っていた藤丸立香が前に出て、差し出した手に宿る令呪が光り輝いた。

令呪の一角の消費により力が流れ込み、3号のライダーキックの勢いが増していく。

「うおおおおお!!!」

ドライブの『トライドロップ』と、3号の『ライダーキック』、二大ライダーの必殺の蹴りが押し通ってソーサラーと4号の一撃を退かせた。

蹴り飛ばされた二人は、部屋の壁を打ち破り、そのまま高所から放り出される。

「なん……………だど……………」

「馬鹿な……………またしてもっ!!」

霊核を砕かれ、身体が罅割れ爆発した後金色と粒子消えていくソーサラー。

4号も召喚元が消え去り、身体が透き通っていき消滅する。

敵を打倒した今、並び立った両者は互いの顔を見合わせる。

「終わったな……………」

「ああ……………」

「……………いくのか?」

「俺がここにいない必要はもうないからな。じゃあな」

短いやり取りを終え、振り返って歩いていくドライブ。

その先にいたのは、藤丸立香。

彼の方に手を乗せ、気楽な感じの言葉をかける。

「ありがとな、アイツと一緒にいてくれて」

「ああ、どうも……？」

「次はお前達を守る番だ。頑張れよ」

「え、それはどういう……」

立香が聞き返す前にドライブは自分の役目が終えたかのように目の前から消えてしまふ。

それと同時に、グラリと部屋全体を大きな振動が襲う。

なんらかの地震か？いや違う、この世界を創ったキャスターがいなくなった今、この特異点が維持できなくなってしまったのだ。

それを証明するかのように突き破った穴の向こうから広がる街並みの向こうの端から崩れ消えていくのが見える。

飲み込まれればひとたまりもない事は明白だった。

「ヤバイ、ライダー逃げよう！」

「待て、立香。お前が行くのは俺とじゃない」

「え、何を……」

立香が3号の元へ駆け寄ろうとした時、突如伸びた手が首根っこを掴まれた。

そのまま3号は、そのまま頭上へ飛び上がって拳で天井を突き破る。やがて城の一番高い屋根の上までたどり着くと、彼は立香を抱き上げ、彼にこう言った。

「じゃあな、立香。人類最後のマスター……お前は、お前のやるべきことをやり通せ」

3号はそう告げた後、立香を真上目掛けて両腕で空高く投げ飛ばす。

立香は高く高く舞い上がっていき、……突如現れた『孔』の向こうへと消えていった。最後に目に映ったのは、必死に手を伸ばす立香の姿だった。

「——ライダァー——!!!」

「たつく、2度目もそう、悪くはなかったな」

仮面を外し、この世界から旅立ったマスターを見送った黒井響一郎は、消えていく特異点の中でただ一人そう呟いたのだった。

最終話

「先輩……先輩!!」

誰かに身体を揺すられながら目を覚ます藤丸立香。

そこは、ノウム・カルデアにおける自室だった。

傍にはマシユの姿があり、涙で頬を腫らしながら自分の名前を呼んでいた。

「先輩、目を覚ましたのですね！よかったあ……！」

「マシユ……俺、どうしていたんだ？」

「憶えてないのですか？先輩……？」

自分が何が起きたのか理解していない立香に、マシユは不思議そうに見つつ状況を説明を始める。

——事の発端は、突如発生したある特異点での調査に赴こうとした時の事。

同行しようとしたセイバー アルトリア・ペンドラゴン、アーチャー エミヤ、ランサー クー・フリーンの3騎は例シフトに失敗しコフィンから弾かれてしまい、マスターである立香だけがレイシフトに成功した。

たった一人だけで特異点へ放り出された立香の生存確認すらままならず、ダヴィンチちゃんや他のキャストのサーヴァント達の奮闘も空しくどうにもできない状態だった。

……諦めかけていたその時、突然現れた銀色のオーロラのような壁が現れ、そこから立香が現れて倒れこんだという。

そして現在、こうして自室のベットにて寝かされていたという。

「本当に無事でよかったです。あの後、特異点は無事消滅しました」

「どうやら俺、相当マシユやみんなに迷惑かけてしまったようだね」

「でも先輩が帰ってきて本当によかったです」

流れていた涙を拭いて、マシユは笑みを浮かべる。

そんな健気な彼女に対して、立香はほっとした様子で笑顔を向けた。

「それで先輩、特異点で何があったのですか？」

「信じられないかもしれないけど、俺、助けられたんだ」

「助けられたって……誰に？」

「——仮面ライダー、愛と平和を守るヒーローにね」

何処かの空間。

そこに変身を解いた黒井響一郎の姿があつた。

何故自分かここにいるんだ？本当ならばあのまま特異点と共に正しい歴史の中へを消えるはずだった。

魔力元であるマスターも居なくなつた今、魔力が切れて自然消滅を待つはずだが……。

「何故、オレはここにいるんだ？」

「——そりやまあ、俺がこの場に呼んだからな」

そこへ現れるのは、一人の青年……見覚えがある、デイケイド・オルタの姿だ。

いまだにその顔をフードで隠す彼は、その奥で笑顔を向ける。

「よお、黒井響一郎。元気にしていたか。さつきぶりだね」

「お前は……一体なにをするつもりなんだ」

「具体的に言えば、お前をこのまま逝かせるには惜しいって思つてな。そこで、こういうものを用意していた」

そういうと、デイケイド・オルタはあるものを取り出す。

それは黄金の杯……聖杯だった。

驚く響一郎に対してニヤリと口角を上げながら見せると、デイクイド・オルタは悠々と語りだす。

「何でも叶う万能の願望機、何か使えるかなと回収しておいてよかったぜ」

「それをどうするつもりなんだお前」

「本来だったら別に使わなくてもよかつたけど、お前がいるなら話は別だ」

そういうと、デイクイド・オルタは聖杯と高く掲げる。

すると聖杯から漏れ出した光が、響一郎を包み込む。

それと同時に不思議な感覚に陥った。まるで「シヨツカーの世界」にいた頃と同じ感覚だ。

「これは……」

「受肉……ってわけではないが、お前を元の仮面ライダー3号として独立させるんだよ」

「お前は一体何者なんだ？何故そこまでする？」

響一郎の問いに一瞬、悲しさを孕んだ笑みを浮かべるデイクイド・オルタ。

少し溜めた後、彼は口を開く。

「——あえて言うならば、おれは言わば『仮面ライダーだった誰か』に過ぎないのさ。」

表に出ているこの「俺」も、ディケイドの力を借りている素顔を仮面で隠した誰かなのさ」

「ライダーならば誰でもよかつたのさ。偽悪ぶつたカメラマンでも、笑顔を守る冒険者でもね」

「今回は運よく「俺」になつたわけだ。じゃなければ、破壊者なのに裁定者^{ルイラー}なんてクラスに割り振られるわけないっての」

「お前を助けたいと思つたのは……そうだな、この霊基がそう訴えかけていたからだ。なんてつたつて何十人ものライダーを重ねて合わせた代物だからな」

にこやかに笑顔で語り掛けてくるディケイド・オルタ。フードの中から覗く口元からは何処か苦しそうな表情が見て取れた。

響一郎は手を差し出し、握手をしあう二人。

「ありがとう、ライダー。お前の事は忘れないよ」

「仮面ライダー3号、お前はもつと人を救える。世界を超えて助けに行け」

「——じゃあな」

そうつぶやいた後、響一郎は消えてゆく。

この空間から弾き出され、別の世界へ向かつたのだろう。

そう判断したディケイド・オルタは名残惜しそうに聖杯を見つめる。

「さーてと、これどうするべきかな」

立香が謎の特異点から脱出し、数日の経過した頃の事。

あの後、例の特異点は消滅し、結局何が起きたのかは藤丸立香の証言だけとなった。

仮面ライダーと名乗る謎のサーヴァント、キャスターによる【異世界の上書き】はなごあの都市で起きた事についてゴルドルフ新所長やダヴィンチちゃんといった面子は信じられないことだとコメントをしながら、にわかには信じたい体験を受け止めるしかなかった。

そんな中、一人のサーヴァントが不機嫌そうに廊下を歩いていた。

いつもの甲冑の衣装とは別の衣装……かつての亜種特異点で来たときれている通称【新宿のオルタちゃん】衣装を纏ったジャンヌ・オルタだ。

彼女は何かに対して怒っている様子だ。

「まったく、なんなのよ！あの仮面野郎!!」

害虫を噛み潰したような顔をしながら、ずかずかと足取りを進めていくジャンヌ・オ

ルタ。

——というのも、今朝突如例の特異点での記憶を見たのだ。

本来ならば関わりのないはずの彼女との記憶が流れ込み、そこであった【あの男】とのやりとりに悶えていたのだ。

たまたま通りかかった青いドレス姿に甲冑を身に纏った金髪の騎士……アルトリア・ペンドラゴンがジャンヌ・オルタ心配そうに訪ねてくる

「くっそ、思い出すだけで身悶えしてくるわ！あの女以上にいけない奴がこの世にいたなんて！」

「大丈夫なのですか、ジャンヌ・オルタ」

「ん？ああ青い方か。……大丈夫よ、ほっときなさいな。これ当分はしつこくこびりついてしまうから」

「そうですか……なんだか他人事ではない気がします……」

どつと疲れた様子のジャンヌ・オルタにアルトリアは付き添いながら何処かへと向かう。

こうして様々なサーヴァント達が集うカルデアでの少し奇妙で変わらぬ日常が続いていく。

……ただ一つ、『珍妙な侵入者』がやってきたことを除けば。

アルトリアとジャンヌ・オルタの2人が廊下を歩いてると、誰かの鼻歌が聞こえてくる。

気が付くと、そこにはカルデア所属の制服を身に纏った一人の男性職員が廊下の向こう側からやってきていた。

馴染みのない顔で誰なのだろうか、と思っていたら向こうの方が気付きこやかな笑みを向けて会釈をする。

「やあ、元気がいい?とところでダヴィンチちゃんの工房はどっちだったかな」

「それならここを真つ直ぐ向って、次の左角に当たる所を向かえばいいと思います」

「そうかい、何分ここには初めてなもんでね。そちらは変わらないようだ」

「……………ここには?」

アルトリアに教えられ、上機嫌に受け答えた男性職員は彼女の疑問符をも気にせずダヴィンチちゃんがいる工房へと向おうとする。

ハッと気づいたジャンヌ・オルタが彼を呼び止める。

「ちよつと待ちなさい、アンタまさか……!」

「おーつと、それ以上はまた会った時に取っておきたいね。今は引越し次いでのコレを届けないといけないから」

男性職員は手元にあったそれを見せつける。その手には黄金の杯……あの特異点で

失われていたと思われていた聖杯があった。

ジャンヌ・オルタの険しい表情がまるで「コイツ、してやったな」というべき苦笑を浮かべる。

それについて、ニヤリと口角を上げた男性職員は背を向けていたところクルリと返し、正面を二人へと向き直った。

「あ、そうそう。名乗っていなかったね……」

「サーヴァント・真名は「仮面ライダー」、今回からカルデアの新しい職員として働くことになった。以後お見知りおきを」

とあるどこかの世界。

平和を終えて令和に移り変わった時代。しかしそこにも平和を脅かす【悪の魔の手】は忍び寄る。

「——くそつ、よくもやってくれたねえ…!!」

悪態をつきながら、ポロポロの体を引きずるのは赤と青を主体とした一人の仮面ライ

ダー。

『ライダー』と刻まれた仮面の裏には苦痛と屈辱を孕んでいた。

——仮面ライダーザモナス、時代を管理する組織・クオーツアアの一人「ジョウゲン」が変身する仮面ライダーであり、先の平成ライダー達に倒されたはずだった。

ザモナスは手元にあつた懐中時計型アイテム・ライドウオッチを見つつ、毒を吐いていた。

「これがなければやられていたよ。くそつ、使わせてやがつてー！」

【AMAZON NEO】

青と赤で彩られたライドウオッチ……アマゾンネオライドウオッチを起動、内包されている仮面ライダーアマゾンネオの驚異的な生命力を行使し、平成ライダーの猛攻なるとか凌ぎ切った様子だ。

だが、このライドウオッチに刻まれた「デメリットも大きく、ザモナスの身体は人間のタンパク質を欲する生命体」アマゾン細胞”によって侵蝕されつつあった。

もはや人間から文字通りの怪物になりつつあるザモナスがすることはたった一つ

……。

「こうなったら、復讐してやるさ……！俺が俺である内にオーマジオウとその仲間を

……！！」

怒気と怨嗟の籠った言葉と共に、自分達を打ち負かしたライダー達を打倒すべく向おうとする。

その結果が自分をも滅ぼす大災害という自滅が待っていたとしても。

そんな最中、強烈な排気音が辺りに響き渡り、驚くザモナス達。

現れたのは白きボディのスーパーカー、そしてそこから降りてきたのは一人の仮面ライダー。

「なるほどな、だったらそういうわけにはいかないな」

「貴様は……一体誰なんだ!?!」

「仮面ライダー3号、闇に葬られたはずの仮面ライダーさ」

歴史に消えていったはずの仮面ライダーは拾った奇跡と共に再び走り出した。未来を取り戻したはずの一人の少年は、今度は数多の未来に打ち勝つべく戦いへと戻る。

絶望か、それとも……。

この先に待ち受ける彼らの物語の生末……それは、誰にも行く末はわからない。

幕間：制作裏話

デイケイド・オルタ「どーもどーも、読者の皆様ごきげんよう。今回の司会担当のデイケイド・オルタだ。ゲストはこちら」

藤丸立香「カルデアのマスター・藤丸立香です」

ジャンヌ・オルタ「アヴェンジャー、ジャンヌ・ダルク「オルタ」よ」

デイケイドA「揃ったところで今回はこの二次創作小説『仮面ライダー×Fate／Grand Order 残光記憶都市』の制作裏話を話してと思う」

ジャンヌA「ところで、ふと思っただけですけどその『残光記憶都市』って一体なんなのよ？ 今回の舞台の事を言ってるの」

デイケイドA「その通り、構想当初は『変異特異点『残光記憶都市 ライダーシティ』』と銘打っていたのさ。なにせ3号ライダーと関わることになるから、『仮面ライダー3号 ライダー大戦GP』で登場したライダータワーを中心して作ったそうなの」

立香「あれ、ライダーシティは何処行ったの？」

デイケイドA「途中で消えた」

1. 当初の舞台

変異特異点 『残光記憶都市 ライダーシテイ』

副題：時代が望んだ者

廃墟となった建物と、僅かに機能を残した施設だけがある謎の特異点。

シャドウサーヴァントが徘徊しており、目に映る者全てに襲い掛かっている。

殆どのサーヴァントが召喚できない場所であり、例え召喚が成功しても何らかの形で存在が歪められてしまう。

その理由が『本来あるはずの並行世界（Ⅱ型月世界の並行世界）』とはまったく異なる『別の平行世界群（Ⅱ仮面ライダーの世界）』にて起きた時空を揺るがす事件の影響が積もってできた残響のようなもの。

何もしなければいずれは消滅するであろう特異点だが、シャドウボーダーに乗っていた主人公は偶然か必然かこの特異点に意識だけ飛ばされてしまった。

その後は『仮面ライダーの世界にて起きた時空を揺るがす事件が反動にできた特異点』、『二部のいずれかの時間軸にて巻き込まれた出来事』として扱っている。

デイケイドA「次は今回戦った選抜サーヴァントについてだ」

セイバー：アルトリア・ペンドラゴン「オルタ」

アーチャー：エミヤ「オルタ」

ランサー：メドゥーサ「オルタ」

ライダー：仮面ライダー3号／黒井響一郎

キャスター：仮面ライダーソーサラー／ファントム・ドレイク

アサシン：異形のハサン（ハサン・ハツバーハ）

バーサーカー：クー・フリーン「オルタ」

アヴェンジャー：ジャンヌ・ダルク「オルタ」

ルーラー：デイケイド・オルタ（仮面ライダー）

ジャンヌA「なんで選抜サーヴァントの私が選ばれたの？」

デイケイドA「端的に言うとなら作者（地水）の推し鯖だったから」

立香「デイケイドさんは”ライダー”なのにルーラーなのは何故？」

デイケイドA「ああ……デイケイドってのが世界の破壊者と呼ばれているせいかな、裁定者であるルーラーに指定されてるんだよ。要するにあれだ、”解き明かす者”なのにルーラーにされた名探偵と同じ理由でな」

2. 没設定

実は構想段階では一部異なっており、エミヤやアルトリア・ペンドラゴン「ランサー」、さらにはデイケイド・オルタ枠としてアルティメットクウガ（クラス：バーサーカー）が存在していた。

最終決戦ではエミヤ・槍王VSアルティメットクウガの戦いが描く予定で、エミヤの作った聖剣でアルトリアが『約束された勝利の剣』をアルティメットクウガ目掛けて放つ構図だった。

また、ソーサラーは他サーヴァントの霊基を乗っ取る形で現界しており、その副産物として各宝具の低位互換の能力を「サーヴァントリング」なる特殊なウィザードリングを所有している裏設定があった。

ジャンヌA「で、結局アンタカルデアにいるみたいな描写あったけど、あれってどういうわけ？」

デイケイドA「聖杯の力を借りてカルデア所属のサーヴァントとして召喚されたんだ。いいだろう？そのくらいしか聖杯の使い道ないんだし」

立香「いやいやいや、凄い聖杯の使い方してるよ。でもなんでカルデアの職員としてなんだろう」

「デイケイドA「結局のところ、どう足掻いてもメインストーリーには登場できないかな。それだったら裏方として活躍するしかないのさ」

立香「でも、またあなたと会いたいよね」

「デイケイドA「それはこつちも思うところさ。もつとも、そんな時は『デイケイド』じゃなくなってるかもな」

【ZII-O】（ライドウオッチ起動音）

「仮面ライダー」——俺が変身できるのは、何もデイケイドだけじゃないぜ」

立香「顔に『ライダー』って書いてある!？」

ジャンヌA「思っていたけども、コイツとことんチートなのよね」

3. デイケイド・オルタのデータ

【仮面ライダー】 クラス：ルーラー（デイケイド選択時）

異世界からやってきた最も新しき英雄。その正体は全ての仮面ライダーを宿した意識集合体。

表立って出ている人格は「仮面ライダーに変身した誰か」であり、他の人格は基本的

に出てこない。

神霊すら凌駕するほどの強大な力を宿しながらFGOの世界では物語の中で語られるだけ無名の英雄は、歴代のライダーを一つの霊基として寄せ集めることによってようやく形成された。

選んだライダーによって、自身のクラスが変わる。

残光記憶都市にて現界された個体は平成ライダーの一人・ディケイドを選び、自らを「ディケイド・オルタ」と称して活躍していた。

宝具『最終変身形態―ファイナルカメンライド―』

ディケイド・オルタの宝具の一つ、歴代ライダーの最終フォームを変身及び召喚によって行使する。

気を許した相手に能力の一部を与える事も可能。

劇中ではビルド・ジーニアスフォーム、エグゼイドムテキゲーマー、ドライブ・タイプロライドロン、鎧武・極アームズを披露した。

ディケイドA「さーて、そろそろお開きの時間だ。リハビリついでに書いていたこの作品だが、完結できてよかったのはうれしい事だ」

ジャンヌA「また会えるんでしょうね。あんな終わり方したんですもの、次はあるん

でしようね？」

デイケイドA「どうだろうかね。構想は考えられてるそうな」

立香「それじゃあ、これで！俺達の旅は続くけど、語られるのはここまでだよ」

三人「「また会う日まで!!」」